

# 『リンディスファーン福音書』

## The Lindisfarne Gospels

白井 直美\*

2002年秋、イギリス中世写本の至宝『リンディスファーン福音書』(大英図書館蔵)のフルカラー・ファクシミリ版が、スイスのファクシミリ・フェアラク社より刊行された<sup>1</sup>。7世紀末の作品としては珍しい45色もの天然顔料を使用し、色鮮やかに描かれた福音書が、約1300年の時を経て制作当初の輝きで甦ったのである。羊皮紙に刻まれたコンパスや定規の跡や、裏面に染み出した顔料まで忠実に再現したこのファクシミリ版は、最新の印刷技術を駆使し、なおも再現が不可能な部分は手作業による補正を加え、実物と違わぬように仕上げられた。

この度、世界限定部数980部の内、貴重な1部が明治大学図書館に収められた。筆者は現在この福音書の制作状況について検討しているが、この機に『リンディスファーン福音書』の性格、および史料としての価値を紹介してみたい<sup>2</sup>。

---

\*しらい・なおみ / 大学院博士前期課程文学研究科史学専攻

<sup>1</sup> *Das Buch von Lindisfarne*, Luzern: Faksimile-Verlag, c2002.

<sup>2</sup> 『リンディスファーン福音書』に関してはこれまで多くの研究がなされている。主要なものとしては次の文献があげられる。

Alexander, J.J.G., *Insular Manuscripts, Sixth to Ninth Century, A Survey of Manuscripts Illuminated in the British Isles, vol.1*, Harvey Miller, London, 1978. ;Backhouse, J., *The Lindisfarne Gospels*, Phaidon Press, London, 1981. ;Bonner, G. et al (eds.), *St. Cuthbert, his Cult and his Community to AD 1200*, The Boydell Press, Woodbridge, 1989. ;Henderson, G., *From Durrrow to Kells the Insular Gospel-books 650-800*, Thames and Hudson, London, 1987. ;Kendrick, T.D. et al (eds.), *Evangelium Quattuor Codex Lindisfarnensis*, Urs Graf Verlag, Olten and Lausanne, 1956-60.

# 1 リンディスファーンの地理と歴史

イングランド北東部。スコットランドとの境に程近い、北海に洗われる小さな島リンディスファーン。日に2回、潮が引いた時にのみ現れる、約5キロの砂の道によって外界と結ばれる神秘的なこの島は、別名ホーリーアイランドとも呼ばれる、中世以来の信仰の島である。

この島の修道院で『リンディスファーン福音書』は、700年頃司教イードフリース (Eadfrith) によって聖カスバートの墓所に捧げるために制作された。縦34cm横24.5cmの上質な羊皮紙を用いた、259葉(518ページ)に及ぶ大型の福音書は、後に宝石を散りばめた豪華な表紙で束ねられたという。残念ながら当時の表紙は失われているがその他の大きな欠損はなく、長い歳月を経たとはいえない輝きを放っている。

リンディスファーン島に修道院が建てられたのは635年。当時ブリテン島は、アングロ・サクソン諸王国が覇権を争う、混迷の時代の真っ只中であつた。時のノーサンブリア王オスワルドの招きに応じて、スコットランドのアイオナ修道院から、リンディスファーンへやってきた司教エイダン (Aidan) は、独自の発展を遂げたアイルランド系キリスト教会の修道士であつた。彼らは熱心に各地に赴いて布教し、リンディスファーンはノーサンブリアのキリスト教化の中心として繁栄した。

しかしリンディスファーンの繁栄は、596年ローマ教皇グレゴリウス1世によってブリテン島に派遣された、聖アウグスティヌスらが広めたローマ教会との対立を生んだ。南のカンタベリーに拠点をおくローマ教会は、アイルランド教会がノーサンブリア以南へ勢力を拡大することを危惧したのである。

両教会は664年ウィットビーで開催された公会議で、復活祭の算定方法をめぐって衝突した。この問題に関する両教会の教義上の差異は些細なものであつたが、「復活祭論争」においてアイルランド教会を論破したローマ教会は、アイルランド教会側にローマ式の算定法を押し付けた。しかし論争に敗れたアイルランド教会の代表、リンディスファーン司教コルマンは妥協を拒み、自身の教義を貫くためにこの地を去つたのである。これ以降ブリテン島はローマ教会の教会制度の傘下に入っていくのであるが、指導

者を失ったリンディスファーン修道院は、急速に荒廃し権威は失墜した。

このリンディスファーン修道院の危機を救ったのが、カスバートである。メルローズ修道院で学んだカスバートは師エータと共にリンディスファーンへ赴き、荒廃した修道院を建てなおすべく尽力した。カスバートはアイルランド修道制の伝統である、隠遁的修行生活を貫きながらも、司教としてローマ教会との和解をすすめ、同修道院が大勢に従うように導いた。謙虚で信心深いカスバートは多くの人々から慕われ、また王からの信頼も篤く、彼が687年に亡くなると、その直後からこの聖人を慕って墓所を詣でる人々は後を絶たなかった。

698年カスバートの没後11年目のこの年に、彼の棺を新しい廟に移すための聖体奉挙の儀式が行われると、ますます多くの人々が訪れるようになり、リンディスファーンは聖カスバートの聖なる島として、広くその名を知られる聖地となった。そして『リンディスファーン福音書』は聖人カスバートへの崇拜が高まりつつあった、まさにこの時に誕生したのである。

## 2 『リンディスファーン福音書』の構成と特徴

この書物はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書の写本からなる。聖書のテキスト部分に先立って、「カーペット頁」と「装飾頭文字の頁」が中扉のようにおかれ、続いて四福音書に共通する記述を示した「対観表」が16ページ構成で書かれている。その後『マタイによる福音書』が配されているが、その冒頭部分には「福音書記者マタイの肖像画」(口絵1参照)、次いで「カーペット頁」(口絵2参照)「装飾頭文字の頁」(口絵3参照)がおかれ、そしてテキストへと続く。後続のマルコ、ルカ、ヨハネによる福音書もこれと同じ構成でなりたっている。

その中でも渦巻、組紐、螺旋を用いた装飾が一面を埋め尽くす「カーペット頁」と、福音書の文言をページいっぱいに描き、その文字に精緻な装飾を施した「装飾頭文字の頁」は、目をひく存在である。この見事な装飾のために、『リンディスファーン福音書』は美術史家の興味をひきつけて止まない。

しかしこの装飾は同修道院固有のものではない。美術史上「ハイバーノ・

サクソン様式」あるいは「インスラー様式」と呼ばれ、7世紀から9世紀にかけて、アイルランドやブリテン島を中心に広くヨーロッパ各地で制作された、類似の装飾写本が確認されている。6世紀末、独自の修道生活を発展させたアイルランド系キリスト教会の修道士たちは、スコットランドやヨーロッパ大陸へ修行と布教の旅に出た。彼らは各地に修道院を建て、その写字室で布教のための聖書を制作した。その際彼らはアイルランドの装飾美術の伝統に、土着の文化や地中海美術の要素を取り入れた。『リンディスファーン福音書』の装飾もその一例とされ、ゲルマン美術の幾何学文様や水鳥の動物組紐を用いた装飾をみることができる。

さらにこの装飾に加えて『リンディスファーン福音書』の特徴といえるのが、4人の「福音書記者の肖像」にあらわれている地中海文化の影響である。この肖像画の構図や服装は、近隣のウェアマウス・ジャロウ修道院で制作された『コーデクス・アミアティヌス』の人物像をモデルにしたとされる。『コーデクス・アミアティヌス』はイタリアで作成された福音書『コーデクス・グランディオール』を写したものであり、それ故に『リンディスファーン福音書』も写実的で具体的な地中海美術の人物描写からの影響を受けたとされている。このように抽象的な装飾と具体的な記者像が並存する所も、この写本の大きな特色といえよう。

一方で装飾以外のテキスト部分もまた、聖書学上興味深い特徴を備えている。第一に『リンディスファーン福音書』のテキストが、聖ヒエロニムスが4世紀末に翻訳したウルガタ訳のラテン語で、序文には聖ヒエロニムスの書簡が引用されている点である。第二に同福音書のテキストは前述の『コーデクス・アミアティヌス』との類似が認められる点である。7世紀の年代記作者ベダを輩出したことで知られる、ウェアマウス・ジャロウ修道院は、ノーサンブリアにおけるローマ教会の学術的な中心であり、イタリアから様々な書物が持ち込まれていた。『リンディスファーン福音書』のテキストも、イタリアの影響があらわれたイタロ・ノーサンブリア様式に属している。第三に1ページに2列の柱状に文字を配したダブル・コラムの形状が、ウェアマウス・ジャロウ修道院で制作された他の福音書写本に倣ったものとされている点があげられる。

ところでこの福音書には、古英語による逐語訳が970年頃アルドレド

(Aldred) という司祭によって書き加えられている。彼はラテン語のテキストの行間に、一語一語古英語の翻訳を書き込んでいるが、この逐語訳はラテン語聖書から英語への翻訳例として最古のものであり、言語学上の貴重な史料である。

### 3 『リンディスファーン福音書』制作の歴史的背景 - カスバート崇拝の発生 -

前述したように『リンディスファーン福音書』は、装飾写本の傑作であることから、これまでの研究の大半が美術史上でなされてきた。しかしこの福音書は同時にイギリス中世初期を知る重要な史料として位置づけられ、その制作や存在自体が、この時期のリンディスファーン修道院の状況を反映している。この点に関して『リンディスファーン福音書』を史料としてみてみよう。

カスバートの死(687年)後、リンディスファーン修道院はノーサンブリアの教会再編成の荒波にさらされた。教区の併合を画策するローマ教会の実力者ウィルフリッドの台頭により、リンディスファーン修道院は再び存亡の危機に瀕したのである。

修道士たちはこの危機を回避し修道院を守るために、すでに聖人として信奉者を集めていたカスバートを利用しようとした。先述の聖体奉挙式(698年)やカスバートの新墓所の建設、そして墓所周辺で伝えられていた聖人による癒しの奇跡を記録した聖人伝『聖カスバート伝』(*Vita Sancti Cuthberti*)の作成もこうした試みの一環であった。その結果カスバート崇拝は一層拡大し、彼の名声は広く国内外に知られ、修道院の存続に大きく寄与したのである。

カスバート崇拝の拡大によって、多くの信奉者がリンディスファーンを訪れるようになると、聖人の奇跡の媒体となる聖遺物の存在が不可欠となった。聖遺物とは、元来聖人の遺体の一部などをさしたが、後に多様化して聖人の遺品や衣類など、ゆかりの品々も聖性を帯びるとされ、聖遺物とみなされるようになった。カスバートの場合も、棺や衣服、十字架や聖書が聖遺物として伝えられている。またカスバートの祭壇を華やかに彩る

べく作られた絢爛豪華な『リンディスファーン福音書』も、聖遺物に準ずるものとして崇められ、カスバート崇拜の強化に大きく貢献したと思われる。

ではこの福音書はどのようにして制作されたのであろうか。『リンディスファーン福音書』の最終ページ(518ページ)の余白に以下のような文言がみられる。

「リンディスファーン司教イードフリースが、はじめに神とカスバート、およびこの島に聖遺物をおく全ての聖人に捧げるために、この書を記した。次に司教エセルワルドがこれを束ね、外装をつけた。さらに隠者ビルフリースが外装を黄金や宝石で飾った。最後にアルドレドというとりに足らぬ下級の僧が、神とカスバートの助けによって英語(古英語)の注釈を加えた…」

この文言は、970年頃前述の司祭アルドレドが、テキストに古英語の逐語訳をつけた時に加えたもので、これによって我々は幸運にもこの福音書がイードフリースによって、カスバートのために制作されたことを知ることが出来る。「カスバートに捧げられ」たこの福音書は、同修道院の思惑通り中世を通じてカスバート崇拜の場に安置され、人々の信仰を集めたのである。それ故に793年リンディスファーンがデーン人の襲撃を受けた時、修道士たちは命がけでこれを守り、875年襲撃を逃れて島を離れる時も、彼らはカスバートの棺や聖遺物と共に『リンディスファーン福音書』を携えて避難した。そして各地を転々とした後に、ダーラムにカスバートの新墓所がおかれると、再びこの福音書はその祭壇に捧げられたのである。

この後『リンディスファーン福音書』がどこにあったか詳しくは伝えられていない。14世紀のダーラムの聖遺物室のリストの中に、それと思しき福音書が見られるが断定するのは難しい。次にこの福音書が世間に知られるようになったのは、17世紀末、収集家として有名なロバート・コットン卿のコレクションにその名が記された時である。名は「Cotton MS Nero D.4」と変わっているが、その説明書きにはイードフリース、エセルワルド、ビルフリース、アルドレドの名とカスバートの名が記されている。その後コットン卿の莫大なコレクションは、1753年の大英博物館創立にあたり寄贈され、現在『リンディスファーン福音書』は大英図書館の展示室

で、カスバートの棺から発見された「カスバートの書」と呼ばれる聖書の隣に並べられている。7世紀末に発生したカスバート崇拝の拡がりの中で、聖カスバートに捧げられ、それ故に修道士たちに守られた『リンディスファーン福音書』は、信仰の島リンディスファーンと聖人カスバートの名と共に、1300年の時を越えて今日まで生き続けているのである<sup>3</sup>。

---

<sup>3</sup> 今回のファクシミリ版刊行に際し、最近の研究成果をまとめた解説書2巻が刊行されることとなった。第1巻はすでに本学図書館に収められており、第2巻も近く刊行予定である。1巻では同福音書の制作や歴史を概説し、また装飾ページの美術史上の考察を展開している。2巻ではさらに詳細なテーマに関する論文が掲載されることとなっているが、中でもこれまで698年以前とされてきた同福音書の制作年を、710年以降の制作であったとする新説が考証される予定である。この点においても『リンディスファーン福音書』に関して新たな論の展開が期待される。